

## 正しい納税は父の叶えた夢の続き

さぬき市立さぬき南中学校3年 佃 幸樹

我が家の押し入れの中にしまってあった昭和63年度の卒業アルバム。少し色あせた緑色の表紙をめくると、過ぎた日の昭和の香りがしたような気がした。アルバムの扉を見た私の目を釘付けにする昭和のエモーショナルな風景。今は廃校となり取り壊されたかつての校舎。校庭の片すみで堂々と存在感を示している大きなイチョウの木。そして更にページをめくるとアルバムに映っていたのは、コロコロと太っていて日焼けした笑顔の少年。あ、お父さんだ。35年前の私の父だった。

父は将来の夢を書く欄に「車屋になりたい」と個性的な文字で書いていた。

そこから時は進んで18歳になった父は、ある大きな企業に就職した。そこで10年間、自動車の钣金と塗装に携わる仕事を続けた。会社では仕事に必要な技術と、人間関係のほろ苦さと、お客様に喜んでもらえる幸せを学んだそうだ。そしてその10年間の修行の経験は何事にも変えられない宝物となったそうだ。

29歳で独立し、法人として会社を立ち上げ自社工場を持ち、車屋になる夢を叶えた父。心に決めていた事があったそうだ。それは国民三大義務である「納税の義務」を正しくする事だ。

前に父は私にこう話してくれた。

「お父さんの仕事でな、一番大事なのは信頼と信用のある会社にする事や。信頼はお父さんの職人としての技術力や。信用は、お金を稼いだら正しく税金を納める事や。信頼はお客様に、信用は世間様に向けてあるんや。」普段はひょうきんな父だが、この時は真剣に私に自分の信念を教えてくれた。

また、父の会社は有限会社なので年に一度国や地方に法人税も納めている。そして納税額や消費税の支払い期日、確定申告等もうっかり忘れないように税理士さんを雇いきちんと経理を管理してもらっているのだ。理由は夢を掴んだからこそ正しく納税したいから。夢を叶えたからこそ、その夢を継続させたい。納税の義務を果たしたいと父は言う。

「2年前、コロナの影響で売り上げがかなり落ちた事があったんや。でも、お父さんが困った時に真っ先に助けてくれたんは国だったんや。」

そう、国から持続化給付金を頂いたのだ。仕事が激減して苦しかった期間、父の会社は税金によって助けられた。それは、父が納税の義務を果たしているからこそ、お金を受け取る権利があるのだ。納税する事で誰かを助けたり、助けられたりしているんだなと思う。

令和4年度の国の税収のトップ3は消費税、所得税、法人税だ。父はこれらの全てを正しく納税しており、私は父を誇りに思った。

「いやあ、しっかり働いた後のビールはうまいわあ！あ、お父さんこのビールの税金もちゃんと納めたで！酒税な。」

そう言って笑う父の姿は、あの日コロコロと太った少年が見た夢の中にいる。